

牧畜民アリアールの人びとと経験した 2007 年ケニア総選挙

内 藤 直 樹*

混乱のなかのフィールドワーク

2007 年 12 月 27 日におこなわれたケニアの総選挙は、現職のキバキ大統領の「不正選挙疑惑」を契機とする大きな混乱をまねいた。この混乱にともなってケニア西部地域や沿岸地域および首都ナイロビなどで発生した暴動により、1,000 人以上の死者や数十万人規模の国内避難民や難民が発生した。このときわたしは、ナイロビから北に 400 km ほど離れたマルサビット県でフィールドワークをおこなっていた。わたしは 1999 年から牧畜民アリアールの集落に住み込んで、人びとの生業と民族アイデンティティの動態に関する調査をしている。住み込んでいた集落は最寄りの町から 40 km ほど離れた遠隔地に位置していたため、普段車がくることはほとんどなかったし、外部からの情報もなかなか入ってこなかった。ただ幸いなことに、調査地付近で暴動が発生することはなかった。

騒々しかった投票が終わった 2008 年 1 月初旬、わたしは集落の人びととラジオで選挙結果の発表されるのを待っていた。しかしラジオが伝えたのは首都ナイロビの政治的混乱や各地で発生した激しい暴動の様子についての生々しいニュースだった。わたしは、そう

したニュースを聞きながら、不安な日々を過ごしていた。また、町に行ってきた人びとからは、砂糖、穀物、ガソリンといった生活や調査に必要なさまざまな商品が入手できなくなったという話を聞いた。これらの物資のほとんどはナイロビ経由でやってくるのだが、混乱のために市場が機能していなかったからである。わたしは牧畜民の集落にいたので、乳が利用できるし、餓えることはないと思っていた。しかし、いざというときは車でエチオピアに逃げようと考えていたが、十分なガソリンが入手できそうにないことが悩みの種だった。結局この混乱は、国連のアナン元事務総長がケニアを訪問し、調停をおこなった直後から急速に解決に向かい、現在の与野党間の連立政権が誕生した。

与党・国民統一党 (PNU) を擁する現職のキバキ大統領は、ケニアでもっとも人口が多く支配的なキクユ族出身であり、対する野党・オレンジ民主運動 (ODM) のオディンガ氏はケニア西部の有力な民族・ルオ出身であった。ナイロビやケニア北西部の人びとの口からは「今回の大統領選挙はこれまでケニアを支配してきたキクユ対非キクユ全体の間の戦いである」という言説をよく聞いてい

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



図1 調査地の位置と民族

た。すなわち民族への帰属が政治的な争点になった。そして「キバキ大統領が、選挙結果を操作し、不正に勝利した」という疑惑が、人びとの間に構築された対立意識に火をつけたのである。

このように2007年末の総選挙は民族主義を激化した。ところでケニアの総選挙では、大統領選と同時に国会議員選もおこなわれる。国会議員は210に区切られた小選挙区ごとに選出される。各小選挙区においても、与野党が候補者を擁立するため、激しい選挙運動が繰り広げられる。この選挙運動のなかで、これまで同じ選挙区のなかで共生的な関係を維持してきた調査地の牧畜民間の関係や民族アイデンティティのあり方が大きく変容した。それは乾燥地という予測が難しい環境

における牧畜生活に適応した状況依存的なアイデンティティが、固定的で均質なアイデンティティに変質する過程であった。

「予測が難しい環境」における「状況依存的なアイデンティティ」

わたしが調査対象としてきた牧畜民アリアールは、ラクダ放牧に依存した生活を営んでいる牧畜民レンディーレの一部と、ウシ放牧に依存した生活を営んでいる牧畜民サンプルの一部が集まってできた集団である。先行研究によればアリアールは、互いに異なる家畜に依存しているため資源をめぐる競合が少なかったレンディーレとサンプルが、共生的な関係を維持する過程で形成された[Spencer 1973]。アリアールの多くは、サ



写真 1 アリアールの集落
(マルサビット県, 2007 年)

ンブル語とレンディーレ語の両方を理解するが、日常的にはサンプル語で会話している。「アリアール」とはレンディーレ語による呼称であり、サンプル語では「マサゲラ」と呼ばれる。しかしこれまで、「マサゲラ」という単語の意味を知っているサンプルやアリアールは、一部の老人だけであった。

サンプル、アリアール、レンディーレの 3 つの民族が牧畜生活を維持していくためには、親族ベースの相互扶助関係が重要である。くわえてこの 3 つの民族の間には親族や民族の範囲をこえた相互扶助関係のネットワークがひろがっている。こうした越境的な相互扶助関係のネットワークは、個人や集団単位の移住を契機に形成された。アリアールの人びとは、このような越境的な関係のネットワークのなかで場面や状況に応じて自らのアイデンティティを表明してきた。

たとえば 2002 年の調査時に、調査地のアリアールの青年が家畜の群れを集落から遠く離れた地域に連れて行った際、その地域の集落の人びとが利用している放牧地と水場を利

用しようとした。しかしながら集落の長老たちは、青年に対して「おまえたちよそ者は、私たちの土地から出て行け」と言明した。ところが交渉を継続するうちに、青年が帰属する親族集団と長老が帰属する親族集団との間に越境的な相互扶助関係があることがわかると、青年はその関係を強調し、結果的に放牧地と水場の一時的な利用が認められた。

このような状況依存的なアイデンティティは、予測が困難な環境で牧畜を継続するうえで重要な生業戦略のひとつとして評価できると考えられる。ケニア北部のような乾燥した生態系の特徴は、単に「乾燥している」というよりも、むしろ「いつ・どこに雨が降るのかを確実に予測できない」ところにあることが明らかになっている [Scoones 1996]。牧畜民はこうした生態環境のもとで家畜とともに臨機応変な移動をくり返す過程で、他集団や他民族の土地や資源を利用する必要に迫られる。状況依存的なアイデンティティは、そのような他者の土地や資源の利用にともなう軋轢や紛争の可能性をへらし、土地や資源への柔軟なアクセスを可能にしてきたのである。

国会議員選挙と新たなアイデンティティ

しかしながら、2007 年の総選挙時に、アリアール出身の国会議員を支持する若者たちの一部が「自分たちはレンディーレと明確に異なる民族集団『マサゲラ』である」と主張しはじめた。アリアールとレンディーレはともにライサミス選挙区で生活している。この選挙区の住民のほとんどはレンディーレとア



写真2 国会議員選挙の運動員によるアリアールの集落の貯水槽への給水（マルサビット県, 2007年）

リアールである。ライサミス選挙区では与党・国民統一党（PNU）がアリアール出身の候補者を、そして野党・オレンジ民主運動（ODM）がレンディーレ出身の候補者を擁立し、熾烈な選挙運動を展開した。とくに2007年12月27日の投票日やその直前には、両陣営は演説や歌をがなりたてるスピーカーを搭載した4WDの車やトラックで昼夜を問わず集落をまわり、激しい選挙運動を展開した。その際、人びとの歓心を得るべく、お金や食料、水などを提供することも忘れていなかった。

ところでライサミス選挙区を含む北ケニアの複数の選挙区では、2005年にも国会議員の補欠選挙がおこなわれていた。北ケニアの民族紛争の調停に向かった現職国会議員たちが任期中に飛行機事故で死亡したためである。つまりライサミス選挙区では選挙運動が2005年から2007年にかけての約2年間にわたって継続したことになる。死亡した国会議員はレンディーレ出身だった。多くの人

びとが、補欠選挙の勝者は死亡した国会議員の妻だと予想していた。ところが、このときアリアール出身の候補者が国会議員の座を勝ち取ったのである。この結果は、レンディーレにおおきな衝撃をあたえた。そして候補者たちと、彼らを支持するアリアールやレンディーレの運動員たちは、この補欠選挙の直後から今回の総選挙にむけた選挙運動を開始していた。

また2006年にはアリアール、2007年にはレンディーレで、約14年ごとに執行される集団割礼儀礼がおこなわれた。集団割礼は基本的に親族集団単位でおこなわれるため、この時期はアイデンティティの状況依存性が低下する。なぜなら、普段はさまざまな地域に居住している人びとも、割礼儀礼に参加するため、自分の親族集団の集落に集まるからである。逆にいえば、この時にどこの集落で儀礼をおこなうかによって、親族や民族アイデンティティが決定される。国会議員選の候補者たちは、アリアールやレンディーレの支持を得るために、割礼の援助として移住用の車の手配や金銭・物品の提供などをおこなった。その結果、割礼というローカルな文化的実践が、選挙という政治的資源をめぐる戦いに強く結びつけられたのである。その過程で1)「マサゲラ」はレンディーレとは異なる文化をもつ集団であり、2) レンディーレに比して不当な政治的扱いを受けているとする言説が流布した。

たとえばアリアールの国会議員候補を支持する運動員たちは次のような演説をおこなった。「これまでのレンディーレの国会議員は、

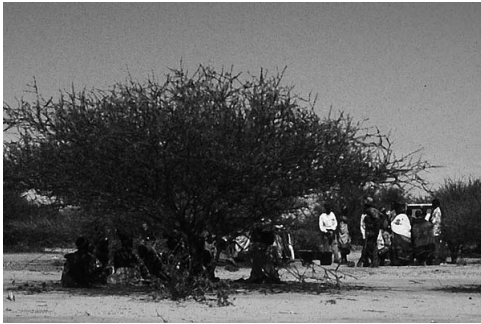


写真3 国会議員選挙の投票をおこなうアリアル
の人びと（マルサビット県, 2002 年）

私たちの陳情を聞いてくれなかった。なぜなら私たち『マサゲラ』はサンプル語を話す
が、レンディーレ語はうまく話せない。だから私たちの言葉で直接対話することができる
国会議員が必要だ。」こうした演説が繰り返されることで、レンディーレと対立的な利害
関係をもつ均質な固定的な「マサゲラ」アイ
デンティティが構築された。

これまでの状況依存的なアイデンティティ
にもとづくアリアルとレンディーレの相互
扶助関係は機能しにくくなった。たとえばあ
るレンディーレの長老は、「アリアルに貸
していたラクダを強制的に回収する」と発言
した。また、アリアルの集落が分裂する
という事態も生じていた。もともとアリアル
の集落には、レンディーレやサンプルからの
移民やその子孫も暮らしている。しかしなが
ら、これまで人びとは集落内の「異民族」の
他者性を強調しないように努めてきた。ところ
が2007年の総選挙時には、選挙運動員を
中心とする教育をうけた人びとや財・権力を
もつ人びとが、こうした集団内の差異を強調
し、それを政治的立場の差異に結びつけるよ

うになった。このような民族や親族集団への
帰属意識の道具的な利用は、これまで共生
的な関係を維持してきたアリアルとレン
ディーレの間に大統領選と同じ民族主義的な
対立構図を構築した。

しかしながら選挙後、アリアルやレン
ディーレの人びとは独自のやり方で、構築さ
れた敵対意識を無化しようとしていた。ナイ
ロビでの混乱が小康状態となった2008年2
月に、わたしはあるアリアルの長老に、彼
が住む集落を構成する各家族の移住史につ
いてインタビューした。その集落は国会議員選
挙時に生じた成員間の対立によって2つに
分裂していた。長老は分裂した集落の人びと
の家族史について言及する際に躊躇した。な
ぜならその家族はもともとレンディーレから
の移民であり、そうした人びとのオリジナル
の出自を暴露することは、彼らの他者性を強
調し、集落から排除することを意味するから
だ。ところが、その場にいた教育をうけた選
挙運動員の若者は、「言ってしまえ、隠すこ
とは何もない。私たちアリアルはアリアル
の候補者に投票するべきだ。しかし、あい
つらはもともとレンディーレである。だから
レンディーレの候補者を支持するのだ」と発
言した。このように教育を受けた若者は、歴
史的差異と政治的態度の差異という2つの
異なる「差異」を結合する民族主義的な発言
をおこなった。しかしながら長老は集落の分
裂後でさえも、外部者のわたしに対して、人
びとの間に存在する歴史的差異を隠し、状況
依存的なアイデンティティを維持しようとし
ていた。

選挙の経験がもたらした新たな研究のタネ

2007年のケニア総選挙時に、北ケニア・ライサミス選挙区には「マサゲラ」という新たな民族アイデンティティが出現していた。それは国会議員という政治的資源をめぐる争いのなかで、サンプルとレンディーレの境界におけるゆるやかな文化共同体・アリアルが、明確な輪郭をもった文化・政治共同体「マサゲラ」として再編される過程の一部だと考えられる。そしてそれは、これまでの民族や親族間の越境的な相互扶助関係が弱体化したことを意味した。しかしながら、これまでアリアルが越境的な相互扶助関係のなかで維持してきた状況依存的なアイデンティティは、予測が困難な環境における生計維持戦略のひとつとして重要である。それゆえ激しい選挙運動が終わった時、一部の人びとは選挙によって均質化・固定化したアイデンティティを再び状況依存的なものに「修復」しようと努めていた。とはいえ今後も数年おきに展開される選挙運動は、アリアルやレンディーレの状況依存的なアイデンティティをさらに固定化・均質化していくと予想される。このように牧畜社会の人びとが国家に包摂される過程でアイデンティティの状況依存性が失われれば、予測が難しい環境における牧畜生活を継続することがますます難しくなるであろう。とはいえ人びとが牧畜生活

を続けていく以上、これまでの状況依存的なアイデンティティに替わる「他者との共存の論理」が必要である。それがどのようなものか、わたしにはまだわからない。ただ今回の経験は、ケニアに210ある小選挙区のそれぞれで、民族主義的な対立構造が構築されていることを示唆している。そして各選挙区の人びとが、選挙後の対立構造を解消するために、さまざまな努力をおこなっているとすれば、そこから学べることは多いのではないだろうか。いわば選挙の比較民族誌的研究を通じて、ケニアの人びとの「他者との共存の論理」のあり方について考えることができるかもしれない。長期にわたってフィールドワークを続けるなかで予想外の混乱に巻き込まれたときに、研究のタネをひろうということもあるものだと感じた調査だった。

本稿は京都大学グローバルCOEプログラム「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」ナイロビ・フィールド・ステーションホームページに掲載したコラムに加筆・修正したものである。

引用文献

- Scoones, I. 1996. *Living with Uncertainty: New Directions in Pastoral Development in Africa*. London: Intermediate Technology Publications.
- Spencer, P. 1973. *Nomads in Alliance: Symbiosis and Growth among the Rendille and Samburu of Kenya*. London: Oxford University Press.

ジャカランダの木の下で考えたこと

—マダガスカル of 青少年更生施設を訪問して—

西 本 希 呼*

マダガスカルでの初めての現地調査時に日本から持参したハイビスカスの花輪が、現地の人々の目に留まり、たちまち人気となった。それ以来、私は、首都で「花」と呼ばれている。ハイビスカスという、南国のイメージがあり、実際マダガスカル of 南部ではハイビスカスの花を見ることができが、首都は標高が約 1,500 m と年間を通して涼しい気候であり、首都近辺 of 居住者は、ハイビスカスを見る機会 is あまりない。一方、日本人 of 私 of 目に留まったのは、ジャカランダという紫色 of 花をつける木である (写真 1)。9 月ごろに、紫 of 花が桜 of 木 of ように満開となり、街路樹として、町を色彩豊かなものになっている。

私は、マダガスカルとインドネシアを主な

研究調査地として、言語 of 記述を基軸に現地調査を行なってきた。なぜ、アフリカ大陸 of 東海岸 of 島と、東南アジア of 島を行き来するかというと、マダガスカル語は、インドネシア諸島で話されている言語と同じ系統 of 言語であるためだ。

知らない土地に降り立った際に、一番初めに足を運ぶ場所は、市場である (写真 2, 3)。現地に到着した翌朝にホテルで現地 of 治安情報を尋ね、その後、市場へ散歩に出かける。地域社会 of 物価を知り、市場 of 売り子と仲良くなれば、生活 of 知恵や、現地で生きるコツを教えてもらえ、モノを買えば、さらに会話ははずむ。市場で売り子と話し、現地情報を得ることは、異文化への適応への最善策であり現地調査 of 出発点であると私は考えてい



写真 1 ジャカランダ of 木 (マダガスカル)



写真 2 インドネシア (サヌール市) of 市場

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真3 スタンプを売る路上商人（マダガスカル）

る。調査の過程において、さまざまな社会階層の人々と交流し、研究協力を得た。

ここで述べるのは、私を温かく迎えてくれた、マダガスカル首都アンタナナリヴの郊外にある青少年更生施設の子どもの話。裁判所から観護措置の決定によって送致された青少年が入所する施設である。日本でいう、少年院や、児童福祉施設などに相当する。

紫の花の木の下で、毎日のように刺繍入りの布、編み物、小物入れ、パニラ、香辛料などを必至に売り歩く人たちがいる。実際の価格の10倍以上の法外の価格で売りつけてくる売り子も少なくない。市場での情報収集を終え、ある程度の現地情報を知った後、貧困や病や障害などの社会的ハンディを他者にさらけ出すことにより同情心を狙った金品追及や法外な価格で値段交渉を求められた場合、私は、正面からぶつかり、とことん議論を行なう。結果は、現地価格で購入できたり、私の所持品と物々交換を行なったり、良き研究協力者となったり、相手側が諦めて去っていくなどさまざまだ。

闘いの後、冷静に売り子たちを見つめなおしてみると、年齢が随分若いことに気がつく。彼、彼女らの中には、青少年更生施設を出て、路上商人としての生き方を選んだ人たちがいる。その実態把握を現場で確認できたのは、3回目の現地調査時である。施設の存在は1回目の調査時から把握していたが、繊細な課題であること、マダガスカルの社会構造や地域社会の慣習を知らずに施設を訪問することは、情報の誤認につながり、また、倫理的側面からの配慮に欠けるのではないかと思い、躊躇していた。2回目までは、国際機関、教会の宣教師団、国際協力、私企業、個人として教育や開発に関わる人からの情報収集を行なってきた。

3回目の調査で、首都の中心街から車で約20分のところにある、女子専用の青少年更生施設（メゾン・ドゥ・ジュンヌ・フィユ）を訪問した。現地で長く研究している人や、マダガスカル人の役人に、「マダガスカルにおける非行少年とその更生施設の実態を知りたい」と相談した際に紹介された施設である。マダガスカル国内には、首都に女子専用の施設が2カ所、男子専用施設2カ所、首都郊外の都市に男女混合施設が1カ所存在する。法務省などの公的機関によって施設の運営費が賄われている公的福祉施設である。対象年齢は8歳以上18歳未満とされ、入所期間は、最短で1ヵ月、最長で1年。施設は全寮制で、私が訪れた首都のA施設では約30名の女子が共同生活を行ない、3名の教員が指導にあたっていた。また、社会学専攻の学生2名が、施設運営の補助などの現場研修

を行ない、一般教養科目を教えている。施設の主な目的は、出所後の生活空間の確保、健全な人間関係の構築のほか、収入を得て自立した社会生活を送るための技術の習得を目指した職業訓練が重要な役割を担う。

訪問先の施設の教員によると、送致理由には、軽犯罪のほか、迷子や、保護者不明があげられる。迷子や保護者不明を理由に、送られてきた青少年に関して、保護者が簡単に見つかるとのかどうかという疑問が生じるが、保護者もしくは引き取り先の親族は 100% の確率で必ず見つかるのだそうだ。

施設の関係者の話によると、ここに送られてきた青少年は無償で衣食住が提供され、教育を受け、社会に出ることができるよう、非常に「ラッキー」なケースであるという。

フランスの非政府組織『国境なき医師団』の 1997 年の推計では首都でのストリート・チルドレンは約 3,500 人とされる。行政機関による要保護児童の発見には限界がある。民間団体もしくは私人が、路上で迷子になっている子どもを保護し、行政機関に届けるという行為は、交通費、人件費、通信費など予算を必要とする。全人口の約 8 割が都市部との連絡が不便な農村部で生活を営んでいる。都市部の就労者であっても、多くの場合、自身の親族を養うので精一杯である開発途上国では、路上で迷子となった子どもを行政機関へ届けることは、容易ではない。

ここに、簡単に施設内の日課を紹介しよう。平日の月曜から金曜までは、朝 5 時に起床し、一日が始まる。編み物、手芸、ミシンのかけ方などの裁縫が一週間の作業内容の

8 割以上を占める。マダガスカル語の読み書きの授業、聖書講読の授業がそれぞれ週に 1 回午前中に約 1 時間割り当てられている。土日に、夕方 4 時ころから数時間、両親が訪問する時間が設けられている。朝 5 時起床という、日本人の時間感覚では早い印象があるが、マダガスカルでは朝市が 6 時ころからにぎわい、5 時起床は彼らの日常生活である。一応の日課と週間予定は決められているが、ダンス、歌、スポーツなどのレクレーションを随時組み入れ、私のような急な訪問者があった場合などは合唱やダンスの披露を行なうなど臨機応変に対応している。食事の準備は、休憩時間にその日の食事係、掃除係が準備を行なう。日本の施設との大きな違いは、算数や社会などの、学校教育で教えられる教科教育が日課に組み込まれておらず、技術教育の一環である裁縫が大部分を占めていることにある。裁縫がなぜ、施設内の日課の大半を占めるかは、彼女らとの対話が進むうちに明らかとなる。受付には、施設の子どもたちが制作したマフラーや小物入れなどの民芸品が販売されている（写真 4）。収入は施設の運営費に充てられる。施設内の事情をよく知る人や、入所者の家族や友人が月に数回程度の割合で、購入や注文にくるそうだが、広く一般には知られていない。

施設の教員に、収容されている約 30 名の送致理由やその背景を知りたいと打診したところ、直接彼女らに聞くと教えてくれるとの助言を得た。繊細な問題であり、個人の人格や背景によって柔軟に対処する必要があるため、日課をともに過ごししながら、個別に話を



写真4 施設の子どもが作った品物 (マダガスカル)



写真5 裁縫を学習中の私 (マダガスカル)

聞くという手段をとった。

私は、日課のうち、裁縫の授業、聖書講読 (マダガスカル語) の授業、昼食の準備に参加させてもらい、最後にダンスを踊った。裁縫は不器用な私にはこなせず、作品は作ることができなかった (写真5)。聖書講読の時間では、マダガスカル語を音読したところ、激励の拍手で温かく迎えてくれた。ちなみに、訪問時の収容者のうちの3分の1が非識字者である。私が食事係の担当をさせてもらった日に、日本から持参したカレールーと現地で調達した野菜や肉で、カレーライスを作った。一緒に料理をしたり、彼らが手がける手工芸品の作り方を習ったりしているうちに、打ち解けて話をしてくれた少女が数名いた。彼女がこの施設にやってきた理由は、家政婦として働いていたときに、働き先の家庭の金品を盗んだためだという。

最後に、将来の夢は何か、将来どんな職業につきたいか、と尋ねたところ、27名のうち、事務員志望が1名、乾物屋の店員志望が2名、美容師志望が1名、残りは手工芸品作りやその売り子との回答を得た。施設管



写真6 破棄となった空き缶で作られたおもちゃ (マダガスカル)

理者の話によると、出所後は、家で手工芸作業を行ない、露店商人や路上商人として生計を立てるケースが多いらしい。

毎年、南部での調査を終えて9月に首都へ戻る。ジャカランダの花が満開となり、私をよく知る路上商人や、露天商人が、モノを売りに来たり、調査の様子を聞きに来たりする。不合理な要求に対して、正面からぶつかりあい、喧嘩や議論をしあった商人たちとは、今では、すっかり仲良くなった。オーダーメイドで私の好みに合わせたおもちゃを作ってくれる。たとえば、日本のジュースの空き缶を持参すれば、空き缶の模様を生かし

た車を作ってくれるとのこと（写真 6）。

日本においても少年院などの更正施設の存在意義や実態は、脚色されたメディアによる間違っただけの印象や、事件発生後の感情論が先走り、正しく理解されていない。日本では、概して少年院や児童福祉施設は、一般社会に対して閉ざされている側面がある。一方、途上

国では、法の整備や社会制度上の保障は追いついていない傾向にある。青少年更生施設に照準をあて、法的側面と社会福祉の側面の両面からの分析を行なうことにより、途上国における現行の社会制度と子どもの教育システムにおける問題点を明らかとすることを今後の課題とする。

イノシシを通した島と島との交流

—「第 2 回カマイ（イノシシ）サミット」の報告—

蛭原 一平*

11 月に入ると北風が強く吹きつけ、長袖が必要な日も多くなる。曇りがちの日が続く、沖合の波も高くなる。晴れ渡った紺碧の空に群青の海、といったような南国の趣はあまり感じられない。そんななか集落のあちこちから、イノシシ捕獲用の罠をつくる音が聞こえ始める。ここ沖縄・西表島にイノシシの時期がまたやってきたのだ。

沖縄でイノシシというのは、あまりピンとこないかも知れない。しかし、奄美諸島や沖縄島、そして石垣島や西表島といった、面積が比較的大きく、森林の広がる島々にはイノシシ（リュウキュウイノシシ）が棲息し、古くから狩猟され（写真 1）、暮らしのなかで利用されてきた。そのような琉球列島における人とイノシシとの関わりを見つめ直すとい

うサミットが「亥年」にちなみ 1995 年、沖縄島最北端の集落、奥^{おく}でおこなわれた。それは、大学など研究機関による企画でもなければ、地方自治体など行政が主導となった催しでもなかった。農家や猟師の人たちをはじめ、日頃イノシシに関心を寄せる地元有志が、個人的に親交のある研究者たちと一緒にやっておこなったものだった。

それから干支で一回りした 2007 年 12 月、2 回目の「カマイ（イノシシ）サミット」が西表島祖納^{そない}で開催された（「カマイ」は西表方言でイノシシのこと、当日の会の様子は八重山毎日新聞（2007 年 12 月 17 日朝刊）、沖縄タイムス（同年 12 月 21 日朝刊）、奄美新聞（同年 12 月 24、25 日朝刊）など地元新聞で紹介されている）。琉球列島における

* 国立民族学博物館（外来研究員）



写真1 イノシシを運ぶ猟師（著者撮影）

イノシシの利用と狩猟をテーマとし、西表島を中心に調査研究をおこなってきた筆者は、会の準備や当日の進行をお手伝いさせていただいた。そこで、そのような12年に1度、亥年にのみおこなわれるという、ちょっと変わったサミットの内容や様子についてここに紹介したい。

このイノシシサミットは「サミット」と銘打っているものの、何らかの社会的な働きかけについて話し合うような会議ではない。かといって、イノシシに関連させた単なるお祭りイベントでもない。研究会など学術的な部分も含み、さまざまな分野の研究者や他の地域の人たちと交流することでイノシシに関する情報の交換を図る。と同時に、狩猟や利用といった各地の生活文化について参加者が相互に理解を深め、将来的なイノシシとの関わり方の在り方を考えるというのが大きな趣旨である。そのため、研究者が一方的に情報を発信するのではなく、たとえば今回だと、各島の現役猟師をお招きし、それぞれの島での狩猟の現状について紹介してもらった。また、

座ってばかりでなく野山に分け入り、イノシシから農作物を守るため琉球王府時代に築かれた石垣（猪垣）の巡検もおこなわれた。もちろん、利用の文化を知るためには実際食することも重要で、たくさんのイノシシ料理が用意されたし、人によっては早くから島を訪れ、捕獲されたイノシシの解体現場を見学していた。つまり、このサミットは研究会だけにとどまらず、体をも使った学びの場であったといえるだろう。

当日は、島内や石垣島、そして沖縄県内外から多数の参加者が集い、開催集落の方々以外だけでも70人を超えた。そのなかには全国から駆けつけて下さったイノシシ研究者も含まれる。開催挨拶の後、1日目の午後は、「リュウキュウイノシシは一つのグループとしてまとまるか」と題した黒澤弥悦氏（岩手県奥州市牛の博物館）の講演を皮切りとし、計10名の演者（筆者も含む）による5時間以上にも及ぶ研究発表会がおこなわれた。その内容は、リュウキュウイノシシを含むイノシシ（*Sus*）属の系統分類に関する研究や考古学的研究、そして、沖縄島、西表島、台湾、中国でのブタも含んだイノシシ属動物との関わりとその歴史、さらには狩猟が地域個体群に及ぼす影響といった生態学的研究など多岐にわたるものであった。

その後、参加者一同がイノシシ料理に舌鼓をうち、泡盛に軽く酔ったところで、奄美大島、沖縄島、石垣島、西表島そして台湾という5つの島の猟師たちに登壇してもらい、酒を交えてのパネルディスカッションが始まった（写真2）。すでに狩猟歴何十年にも



写真2 猟師たちが会した当日のパネルディス
カッション (島袋綾野氏撮影)

なる猟師たち、パネラーの止まることのない
語りにフロアの聴衆は魅了され、会が締めら
れたのは夜中の 10 時をまわっていた。

これらの島々では狩猟に関する儀礼や技
術、利用方法そして現在の狩猟状況など異な
る点も多い。各パネラーが、自分たちの狩猟
の文化的背景を紹介しつつ、猟実践と観察に
基づいた、イノシシの行動生態に関する知
識の一端についても言及した。それら語り
のなかには、イノシシを獲るという点に関
し、心構えなど猟師の心性には共通した部分
もあるのだということを実感させられるもの
も少なくなかった。たとえば、西表島の猟
師、那良伊孫一氏な ら いまごいちが「罾を仕掛けるのは獣道
ですが、やはり目線をです、イノシシの目
線にならなければ、イノシシの気持ちになら
なければイノシシの道が分からない」といえ
ば、台湾のパイワン族猟師、サキヌ氏もま
た、多く獲れる猟師の素養として「自分がそ
の動物になり、その動物の目になって、その
動物の習慣をよく知ること」を挙げた。さら
に、何人ものパネラーの口から出てきたのは
イノシシへの感謝であった。父について小学

生の頃から西表島の山中へ猟に出かけていた
那良伊氏は、「生まれた頃からイノシシにお
世話になってきました。もしかしたら西表島
にイノシシがいなければ、祖納の人も西表島
の人も途絶えたのではないかと。それくらい
イノシシに大変感謝しています」、「何よりも
イノシシを大事にしてもらいたいです。山が
あるから、海があるから、森があるからイノ
シシがいて、その結果、我々もこの島に生き
れるんだ」と、いう。奄美大島の猟師、四本
龍太郎氏よつもと りゅうたろうもまた、今もおこない続けている正
月十六日の山の神様へのお参りなどを紹介し
ながら、こう語った。「ブタの尻尾は先が丸
いですが、シシ（イノシシ）の尻尾の先は
ぺっちゃんこになってます。そのシシの尻尾
の平たいところを山の神様がいつもこう掴ん
でおって、猟師に、信仰心のある猟師にです
よ、『はい、次はおまえが行って、あの猟師
にヌサレさせてこい』っち、『ヌサレ』って
いう言葉は頂くとか、授かったとかそういう
特別な言葉なんです。（中略）やっぱり山を
汚さず、山の神に感謝をしながらヌサレを頂
かにかいかんじゃないんかということは親父
に徹底的に教育受けました。」

しかし、このような意識が近年では、共有
されにくくなってきているのかも知れないと
いう声も聞かれた。それに対し、サキヌ氏か
らは、ここ数年主催してこられた猟人学校と
いう取り組みが紹介された。村の青年団の
人も含め、子どもたちを山中に連れて行き、
そこでの 10 日間程の生活を通して自身が教
わってきた猟師の精神や、同じ土地にいる人
間とお互いともに生きていくことの大切さ



写真3 猪垣の見学（尾方司氏撮影）

を教えるという。「今の子どもたちは、インターネットに夢中で山のことも忘れかけてきていますから」と。

会が締められたあとも、猟師たちや参加者が一緒になり、遅くまでイノシシ談義に花が咲いたのはいうまでもない。

2日目は猪垣の見学（写真3）のあと、意見交換会がおこなわれ、参加者たちは今回のサミットを通して気づいた島々の文化や歴史の違いなど、めいめいの感想を述べた。また、狩猟獣でありながらも害獣として、暮らしのなかで深く関わり続けてきたイノシシだからこそ、このサミットのように研究者も地域の住民も一緒になり、地域での歴史や文化を踏まえたつきあい（保全と活用）を考えていく必要があるのだということも改めて確認された。そして、そのための取り組みを互いの交流のなかで育んでいくことを期し、次回以降のサミット継続が約束されたのであった（さすがに12年後というのは長すぎるのではという意見が大半を占めたが）。

開催後、実際に、サミットで知り合った猟

師のところを訪ねる研究者もでてきた。また、サキヌ氏らパイワン族の人たちが翌年（2008年）に西表島を再訪し、逆に祖納集落の住民が彼らの村を訪問した。このサミットを機として、国境をも越えた交流が芽生えたのである。野生生物の保全管理において地域住民と行政や研究者との協働の重要性が指摘されるが、このイノシシサミットのように、住民たち自らが研究者らとともに企画し、民間での交流を通してこれらの問題を考えようとする取り組みが10数年も前からおこなわれていたことは注目すべきだろう。

また、今回のサミットは、日頃、調査でお世話になっている人たちに自分の研究を直接伝える貴重な場となったことも、個人的な意義として付け加えておきたい。上手く十分に伝えることができたとは到底思えないが、それでも準備や発表を通し、それまで教えてもらえなかった、ある種得体の知れない存在からわずかでも変わることができた気がする。現地の人に教わるばかりでなく、また、研究成果を伝えてそれで終わるのでなく、何度もそのような働きかけを重ねていくなかで紡ぎだされるであろう対話というものもフィールドワークにおいて大切なのではないだろうか。次の開催地はまだ決まっておらず、奄美大島かも知れないし、それとも台湾になるかも知れない。それでもフィールドワークを続け、島と島との交流の輪のなかに加わっていければと思う。

アル＝アハリーとザマーレク

—閉塞するエジプト社会とアフリカ・チャンピオンズリーグ—

安 田 慎*

「エジプト社会を知る一番いい方法は何ですか？」と聞かれたら、間違いなく自分はこう答える。それは「エジプトのサッカー・ファンになる」ことである。

まずエジプトに来て驚かされるのはエジプト人のサッカーに対する情熱だ。アラブ諸国に一般的にいえることだが、とにかく彼らはサッカーを観るのが大好きである。いや、むしろ彼らはサッカーに狂っているのだ。子どもたちが好きなのは世界どこでも見慣れた光景だが、エジプトはそのような和やかな光景で終わるようなやわなものではない。新聞の一面には毎日選手たちの写真が踊り、街中ではそこら中にクラブの旗が掲げられ、ユニフォームを着た人びとが行き交う。試合の日になると、マクハー（アラブ式の喫茶店）や街頭テレビ、人の家の大型テレビの前に年齢など関係なく人だかりができ、仕事を放り出して試合に釘付けになってしまう。こうなったら試合が終わるまで彼らは仕事などしないでテレビの前から離れない。さらに、ただでさえ喜怒哀楽の激しいエジプト人だが、この時はもはや手がつけられなくなるのだ。

このように国民の間で絶大な人気を誇るエジプトのサッカーのはじまりは、20 世紀初

めのイギリス統治時代にまでさかのぼる。欧米人によって設立されたスポーツクラブを皮切りに、エジプト国内に数多くのクラブが設立され、サッカーは普及していった。1921 年にはサッカー協会が設立され、1948 年からは国内リーグが開催されるようになり、国民的スポーツとしての地位を徐々に確立していく。しかしながら、エジプトのサッカーは 1952 年のエジプト革命時や第三次・第四次中東戦争の時代、80 年代末の政治的混乱の時代にリーグの中断・中止という憂き目にあっている。政治情勢に翻弄されてきた歴史がそこには確かにある。だが、そうした混乱のなかでも人びとは変わらずサッカーを愛し続けてきた。このように世代や性別を問



写真1 街頭でのサッカーの観戦
街中では試合の日にこのような光景がみられる。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

わずに愛し続けられているエジプトのサッカーのなかでも、絶大な人気を誇っているのがアル＝アハリーとザマーレクというカイロに拠点を置く2つのチームである。

アル＝アハリーは1907年に創立されたアフリカでも類をみないほど長い歴史をもつ名門チームだ。設立当時、高まる反英運動やナショナリズムを背景に、エジプト人のためのスポーツクラブを設立しようという機運が高まっていた。それに応える形でエジプトのエリートたちが各地から資金を集め、エジプト人の学生のためのクラブを設立した。彼らの思いを象徴するように、チーム名は「アル＝アハリー（国民）」、チームカラーは当時のエジプトの国旗の色であった赤色が採用された。このチームに、人びとはエジプトの連帯と希望を託したといえるかもしれない。チームの輝かしい歴史を象徴するかのように、過去さまざまなタイトルを総なめにしてきた。リーグ優勝30回以上は国内で他の追従を許さない輝かしき歴史である。その他にも、国外のタイトルも数多く獲得してきた。こうした圧倒的な強さを反映してか、国民の半数がアル＝アハリーのファンであるといわれているほどの人気の高さを誇っている。

一方ザマーレクもその歴史は古く、創設は1911年にまでさかのぼる。こちらもその歴史の長さを象徴するように、アル＝アハリーにつぐリーグ優勝10回以上、国外でも数々のタイトルを獲得してきている。近年ではアル＝アハリーに遅れを取っている感があるが、それでもエジプトを代表する強豪であることには変わりなく、カイロを中心に根強い

人気を保っている。

リーグ設立以降、常にこの2つのチームがエジプトのサッカーを牽引し、エジプト・サッカーの歴史とともに数多くの名勝負を繰り広げてきた。この2つのチームの直接対決は今でも国中が注目し、盛り上がるのだ。

このカイロの2つの強豪を応援するエジプト人の熱狂ぶりは、傍からみていると圧倒されるばかりである。サッカーの話題になると必ず彼らが口にするのは、「エンタ アハラウィー アウ ザマルカーウィー？（お前はアル＝アハリーのファンか？それとも、ザマーレクのファンか？）」、そして同じファン同士だと意気投合し、違うファンだと容赦ないブーイングを浴びせてくる。教養ある大人たちでもひとたびサッカーの話題になるといつもの紳士的な態度はどこへやら、子どものように自分のチームを讃えて、相手チームをけなし始める。また、ユニフォームやグッズを身につけていると、老若男女を問わずにエジプト人の方からふらりと寄ってきて、同じファン同士意気投合するのだ。さらに、アル＝アハリーのファンが経営する店でアル＝アハリーのファンだと言ったら、「アル＝アハリーのファンならもっと値段をまけてやる」と言って大幅にまけてくれることなどはよくあること。逆にザマーレクのファンの前でアル＝アハリーのファンだと言うと「お前はアル＝アハリーのファンだが俺はザマーレクのファンだ。お前には一銭もまけてやるものか！」と冷たくあしらわれる。もちろん、逆も起こる。たかがスポーツでそこまでしな

くても、と思う部分もあるが、彼らにとってはそれが人生のなかで重要なことなのだ。

彼らが熱狂する背景には、エジプト特有の「複雑さ」が横たわる。民族的にはアラブ人がほとんどを占めるエジプトだが、ヌビア人や少数民族の民族も存在する。宗教的にも、ムスリムが9割近くを占めるが、1割近いコプト教徒も存在する。さらに、1970年代より押し進められてきた自由主義経済は、エジプト国内の貧富の差を拡大させてきた。大変裕福な暮らしを送る富裕層がいる一方、日々の生活にも困る人びとが併存している社会には、時に愕然とする。こうした民族・宗教・階層による違いが、エジプト社会の分裂と軋轢という問題をつねに引き起こしてきた。そのうえ好転しない経済状況や一向に減らない失業率がこの分裂に拍車をかけ、社会全体に暗い影を落とす。特に高等教育を受けても職に就けない若年層の増加が、社会の活力を失わせている。さらに、政治や社会に対する不満をなかなか表明できない社会のなかで、人びとの間では積りゆく不満と、閉塞感だけが拡大していく。突発的に起こる暴動やテロは、そのようなエジプト社会の閉塞感を象徴しているかのようである。

そうした分裂と閉塞感が漂う社会のなかで、「エジプト」という連帯を演出してきたのが、サッカーであろう。つまり人びとにとっての「エジプト」は、国家や出自、階層のなかに見出せるものではなく、サッカーリーグのなかに見出せるという皮肉めいた現実が横たわっているといえるだろう。そのなかでも、圧倒的な強さを誇ってエジプト・

サッカーを牽引してきたアル＝アハリーとザマーレクという存在は、人びとに連帯をもたらすだけでなく、閉塞に満ちた現実の生活とは違う、輝かしきエジプトを象徴する夢と希望を与え続ける存在であったといえよう。それだけアル＝アハリーとザマーレクはエジプト人の生活とは切っても切れない関係なのだ。とにかく、アル＝アハリーとザマーレクは現代のエジプトの社会とともに歩んできた。そして彼らは因縁の仲であり、同時に良きライバルでもあり続けている。

この2チームがそろって出場した2008年のアフリカ・チャンピオンズリーグはエジプト中の注目の的となった。残念ながらザマーレクは予選リーグで敗退してしましたが、アル＝アハリーは予選リーグを突破し、決勝にまで駒を進めていた。アル＝アハリーの快進撃に、ザマーレク・ファンは「アル＝アハリーなんてさっさと負けてくたばっちゃまえ！」と恨みごとを言う毎日であった。

この決勝に勝てばアフリカ最強の称号を得るだけでなく、クラブワールドカップにもアフリカ代表として出場できる。2006年の出場時にベスト8まで勝ち上がった実績をもつアル＝アハリーにとって、前回の雪辱を晴らしたいところである。こうなるとエジプト中のアル＝アハリーのファンは俄然やる気になるわけだ。もう待ちきれないといった感じに、決勝の第1戦（11月2日）の日が近づくにつれてカイロの街中では赤色の旗がはためき、ユニフォームを着る人が増えていった。新聞紙上は決勝の話題で持ちきり、人び



写真2 街中ではためくアル＝アハリーの旗
決勝戦直前には街中で数多くこのような光景を目
にすることとなった。

とはそわそわする毎日を過ごしていた。

そして運命の11月2日、アフリカ・チャンピオンズリーグの決勝第1戦。相手はカメルーンのコトンスポール・ガルア。近くにあるマクハーでテレビ観戦することに決めていた自分は、試合開始30分前ぐらいにマクハーに赴いた。するとすでに店のなかは人で溢れかえっている。店内だけでなく、路上にも椅子が大量に並べられていたが、そのほとんどが埋まっている状況。路上の後方にある席を陣取ると、シャーイ（紅茶）を頼んで試合開始の時間を待つことにした。ただ、もうこの時から観戦客の熱気が凄い。店主が観戦客を煽り立て、観戦客もその煽りに大声で応えていく。さすがに半袖では寒くなってきた11月のカイロだが、彼らはそのようなことなどまったく気にしない。マクハーでさえこのような状況だから、カイロ・スタジアムの方は推して知るべし、といったところか。約74,000人を収容できるあのとてつもなくでかいスタジアムが全て埋まるのだから、エ



写真3 試合開始前のマクハー
マクハーの中も外も人で溢れかえっていた。

ジプトのサッカー熱の凄さには改めて脱帽する。実際、テレビに映し出されているスタジアムはどこを見渡しても赤、赤、赤。このようななかで試合を行なわなければならないカメルーンのコトンスポール・ガルアに逆に同情を禁じ得ないのだった。

スタジアムと同様に騒ぎ立てていたマクハーの観戦客たちだが、試合開始の笛がなったら途端にテレビ画面に釘付けになって、微動だにしなくなった。固唾をのんで成り行きを見守るとはこのことをいうのか、というぐらいみんな画面から目を離さない。だが試合開始4分、アル＝アハリーが先制点をあげると、それまでの静まりかえった雰囲気が一転、マクハーは一気に熱気に包まれた。観客は総立ちになって喜びを爆発させ、叫ぶ。自分も思わず立ち上がり、隣の親父とハイタッチを交わして喜びを分かち合った。そこには普段の生活のなかにある違いなんて何もない、「アル＝アハリー」という共同体が確かにあった。

その後も攻め続けるアル＝アハリーの試合



写真 4 試合観戦中のマクハー
店先にはアル＝アハリーの旗がはためいている。

展開に、マクハーは「押せ！押せ！」の声援。その間にも、道行く人や自動車がマクハーの前で止まり、「今どうなっている？」と試合経過を気にかける。そうしたなか、前半 15 分に鮮やかなゴールで追加点をあげると、マクハーの熱気は最高潮に達した。若者から爺さんまで年齢を問わずにみんな総立ち、喜びを爆発させて叫んだ。

熱気に包まれていたマクハーだが、その後試合の方は膠着して動かなくなってしまった。動きのない試合に応援し疲れたマクハーの観戦客たちは、シャーイを飲みシーシャ（水たばこ）を吸いながらその成り行きを見守る。試合は結局その後大きな動きもなく、2－0 のままアル＝アハリーの勝利に終わっ

た。見どころは前半の数十分だけであったが、人びとはそれでも満足そうに勝利を噛み締め、各自家路に着くのだった。自分も帰路に着くのだったが、エジプト・サッカーの深さを目の当たりにし、興奮してその夜は寝付けなかった。

決勝の第 2 戦は 2－2 で引き分け、アル＝アハリーは見事アフリカ・チャンピオンズリーグの優勝をもぎ取った。そして 12 月のクラブワールドカップ本戦。数多くのエジプト人たちが決して安くない旅費をはたいて日本までやってきた。こうしてアル＝アハリーはまたひとつの歴史を刻み、エジプトの人びとに夢と希望という名の記憶を刻み込んだのかもしれない。こういう姿を見るにつれ、アル＝アハリーとザマーレクが、そしてエジプトのサッカーが、エジプト人とは切っても切れない関係にあることを痛感させられる。

だからエジプト社会を知りたい人には、自分はたぶんこういう助言をするだろう。

「エジプト社会を知りたいのであれば、アハラーウィーかザマルカーウィーになろう」と。